

「約束を守ってくれてありがとう」

明星学園 宮下 智

ちょうど15年ほど前の思い出話をします。まだ大量の精神安定剤を服用しても睡眠のリズムでさえも整わず、ひとたび心の葛藤を抱えれば、三日三晩、一睡もできずにシーシーと歯間から漏れる音とともに、歩き続けているようなことが頻りにあった頃のH男さんの物語です。物語と言ってもわずか一週間ほどの間に起きたショートショートストーリーですが。

H男さん、この4月から担任となった女性職員のことを、日を追うごとに、段々と心の中で大きな存在になっていくことが自分でも止めようがないようでした。出勤してくれば、いつでもその動向を確認できるようなところに位置取り、チラチラと見つめている。夜勤ともなれば、3日前から寝だめをしていて、夜勤の晩は、寝ている時間が惜しいとばかりに一晩中起きていて、ナースコールの如く床をコンコン叩いて、職員を何回となく呼びつける。そんな毎日だったのです。

そんなある日、その女性職員、夜勤明けの日、いつものように全メンバーにさよならの挨拶をして、帰宅の途に就きました。全メンバーに必ず「また来るからね」と告げて帰ることは、その頃から明星のルールになっていて、「必ず名残を残すようなお別れをして下さい」の要請の下、職員は帰宅しても、なおメンバーさん方の心の中には職員の残像が残るわけです。

その日、彼は明け方まで起きていたわけですが、その全力も残念ながら職員の帰宅時間には尽きてしまって、うっかり寝てしまっていたのでした。さあ、起きてみたら、担任の職員は帰宅してしまっていて姿が見えません。彼にとっては想定外のできごとです。彼のさっきまでの幸福の気持ちは一瞬のうちに嵐の海へと様相を変えてしまったのです。

「僕に、挨拶もしないで、黙って帰ってしまった」…。

冷静に、客観的に考えることができれば、事はそう難しいことではありません。寝ていたから、(しかも一晩中起きていた人が寝てしまっているのだから)起こしてまでして、挨拶をしようとは普通は思いませんから。「なんで起こしてくれなかったんだ!」と言われても、それは言いがかりというもの、しかし、H男さんの立場で考えれば、まんざら「寝ていたお前が悪い!」では、解決できない問題でもあります。背景はともかく、「挨拶しないで帰った」は目の前の事実であるのですから。

担任、次の出勤の日、前回の夜勤明けの状況を伝えます。

「挨拶しないで帰ったでしょう?その後大変だったんだから…」

「挨拶しないで帰ったとH男さん、怒っちゃって…」

当然、職員は答えます。

「だったら、どうしたらいいんですか?」「無理やり起こして、挨拶したら良かったんですか?」

そんな支援者側の想いとは裏腹に、彼の怒りはなかなか解けません。一回そう思い込んでしまった想いを、その頃のH男さんは、変えることができなかったのです。しかし、ここでH男さんが、そんなことも勘違いするような駄目な人間だと思てはいけけないのだと、皆さんには注意を喚起しておくことにします。そう思てはいけけないところに、知的障害者・自閉症支援の専門家としての道があるからです。

まずは、彼らが一回思ったことを変えることができ難い、変えることが苦手であるというのが、まずは、障害上の特性であることを知る必要があります。また、その考えを構築する根っこにある思考の癖は、「超被害的」であることにも注目する必要があります。

「挨拶無しで帰ったこと」がわかった時、「被害的な思考回路」を持ち合わせていない人は、「忙しかったかな?」「忘れたのかな?」なんて思うだけであるし、後日、「寝ていたから起こしちやいけけないと思って、黙って帰ったの」と説明を受ければ、逆に「お心遣い、ありがとう」なんてことになるのですが、これが「超被害的な思考回路」であると、「僕のこと嫌いだから、わざと起こさなかったんだ!」なんてことになるのです。そして、こうして一回出

来上がった結論は、自閉症という障害のせいで、頑なに保持されます。自閉症という障害の中核は「変化への拒否」ですから。

そこで私たちの支援は、次なるステップへ進みます。「黙って帰ったな」と思い込んでいるH男さんの気持ちを解きほぐすには、「H男さんが帰って良いよ、と言わなければ、絶対に帰らない」を経験を持って知らせるしかありません。そこで、次の夜勤明けの日が、挑戦の日と定められました。しかし、そこには大きなハードルがありました。今でこそ、O×カードや表情カードでさえもすいすい選択できる彼であるのですが、十五年前の彼から、YESやNOの反応を引き出すのは、まだ不可能だったからです。そこで考えました。あまり見通しのなかった賭けだったのですが、差し出した職員の手を握り返してくれたら、つまり握手をしてくれたらYES、握り返してくれなかったらNOとしてみようとなったのです。もちろん、H男さんには、何回もその方法を伝えました。

そして、夜勤明けの日。まずは、引き継ぎが終わり、H男さんに尋ねます。「帰って良いですか？」彼は、職員とは目を合わすこともせず、カラカラとお皿回しです。そして、10時…、そして11時…、一向に握手の気配はありません。YES＝握手、本当に分かっているのかしら？見通しのない実践に不安がよぎります。12時…、午後2時…、「本当に私は今日帰れるのかしら？」職員には、心配はもちろん、怒りすらも沸いてきます。そして…午後5時…、ついにH男さんは、職員の問いかけに握手を返したのです。

「H男さんが、帰って良いって握手をしてくれました！」担任の目には、うっすら涙が滲んでいます。ここまで挫けずに粘った職員も立派なら、自分の気持ちを大切に続けたH男さんも立派です。この間、8時間の時間が経過しています。

しかし、話は、まだ続くのです。H男さんがすごいのは、ここからです。

次の担任の出勤の日、彼は、近づいて話しかける担任の頭を、まるでよしよしするかのよう、数回撫でたのです。「良い子、良い子」ということです。もう担任の目からは、涙が止まりません。前回の八時間の努力が一気に花開いた瞬間です。努力の見返りが、突然、予告もなくやってきたのです。見返りを全く期待していない努力に、突然見返りがやってきたのです。

「〇〇さん、このあいだは、ほんとうにありがとう。あんなおそくまで、ぼくのためにのこっていてくれるなんて、じつは、かんがえていなかったんだ。こんなにぼくのことをたいせつにしてくれるひとがいるなんて、かんがえもしなかった。きっとあくしゅしなくなつて、とちゅうでかえるにきまっているとおもっていたけど、〇〇さん、さいごまでぼくとのおそくをまもってくれた。いままで、ぼくはひとをしんじることをやめていたけど、〇〇さんならしんじていいんだとそのときおもえたんだ。これからもよろしくおねがいします。」

何が何だかわからない想いが、担任の心に満ち溢れていきます。何も言葉を話すことのできないH男さんの〈よしよし〉が、8時間の努力の辛さを一気に流していきます。その時に感じたH男さんへの疑いや不信、みくびりを心から申し訳ないと思う自分が生まれてきます。H男さんも新しいH男さんであるなら、支援職員も新しい自分になっていきます。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

「約束を守ってくれてありがとう」H男さんの魂からの贈り物です。最も障害の重い方々から、僕らは時々最高の贈り物を頂きます。しかし、この贈り物は、そんじょそこらでは手に入らない宝物です。見返りを求めない誠実な実践に対してのみ送られるのです。

15年後のH男さん、きっと15年前のあの日のこと、絶対覚えていると思います。そして、僕らの心の中でそれがきらきら光っているのと同じように、彼の心の中でも今でも大きな輝きを放っていることでしょう。そうでなければ、今のH男さんの穏やかな暮らしは、全く説明することができませんから。

WELCOME TO SATORU WORLD

障害者支援施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>